

携帯電話が巻き起こしたこと

市川 ※※
※※ ICHIKAWA

中京大学社会学部現代社会学科

学籍番号 ※※※※※

1 はじめに：現代の若者は携帯によってダメになったのか

現在10代～20代後半くらいまでの、「携帯電話世代」の関係性は、「空気を読む」ことが最も重要な「新村社会」とでも呼ぶべきものになっている。その原因として考えられるのが、ケータイメールの普及やSNSの流行などによる人間関係のネットワークの拡大・細密化である。若者は新村社会で「村八部」にならないよう、つねに空気を読み、コミュニケーションに忙しい。

最近の若者の「草食化」や、消費意欲の減退は、ネットの中の膨大な情報に触れて自分で実際に体験する前にものごとに食傷してしまうというところに要因を求められる。そのようにネットによって狭い行動範囲や興味の中にちぢこまってしまう若者がいる一方で、ケータイやwebを利用して、以前の時代では考えられないほどに関係のネットワークを広げ、その「つながり」の中で助け合ったり、クリエイションをしている若者もいる。

ケータイを悪者扱いしたり、今日の若者を嘆いたりする言説は多いが、悪い面ばかりが強調されてしまっている。若者のことを知ることが重要なのではないか。それはひいては世代だけでなく、時代を知ることにもつながる。

マーシャル・マクルーハンは、「テクノロジーやメディアは人間の身体の「拡張」である」との主張をした。携帯電話の普及。それは、マクルーハンの言うところの「身体の拡張」をすることである。拡張した身体によって現代の若者はダメになってしまったのか。携帯電話の登場によって変わってきたこと、起こること、どうして悪くて、どんなメリットがあるのか。それを考えていきたい。

2 関係の軽薄化

I ケータイ・ネイティブ世代

この本『近代の若者はなぜダメなのか 携帯世代と「新村社会」』に書かれている「若者」とは、ケータイ・ネイティブ世代のことである。そして30代の「最近の若者は分からない」と考える人たちは非ケータイ・ネイティブ世代と書かれている。この双方の間にある大きな相互不理解の原因に「ケータイ文化の登場・発展」があると著者を挙げている。

II 空気を読む

「KY：空気読めない。」という略後が流行ったことがあった。これは1990年代から社会の中で注目されるようになった言葉であり、日本での若者言葉として認識されている。2007年ユーキャンには新語・流行語大賞にエントリーされた。この言葉を作り出したのは、当時10、20代のコギャルと呼ばれていた人たちだ。現在は若者を中心にメールやインターネット上でよく使われる言葉となった。(今では死語になりかけているようだ。)

そして、この日本語の文章を略して各単語の先頭のローマ字・数字を組み合わせた略語群のことを今では、KY語(KY式日本語)と呼ばれるようになった。

III 新村社会

この言葉の誕生から分かるように、若者の間で、「空気を読む」ということはとても重要なことであるようだ。著者によれば、ケータイやSNSなどのコミュニケーション・ツールの発達によってもたらされたコミュニケーションの増大、関係の拡大(過剰)が、ひとつひとつの関係を薄くしてしまったことにより、「キャラクター」などの記号を媒介とした表面的なコミュニケーションが主流になった。そのコミュニケーションでは、その場を楽しくやりすごすことが絶対化し、結果「空気を読むこと」が非常に重要な「新村社会」になっている。コミュニケーションツールの増大によって引き起こされた関係の軽薄化された若者社会「新村社会」では表面的な付き合いが重要になる。その場その場で楽しむことが重要とされ、ひとつひとつの関係の持続を考えないその人たちは、「空気」を読み自分の意見を無理に付き通そうとしない。その場が丸く収まるように、人の顔色を疑う社会になっている。

3 携帯電話依存症

(1) 携帯電話依存症とは？

携帯電話依存症(けいたいでんわいそんしょう)は、携帯電話やPHSといった個人向けの通信機器が提供するサービスに没頭、日常生活に支障をきたすほどになっている状態を示す俗語である。携帯中毒(けいたいちゅうどく)とも。

現在、携帯電話は私にとっても、社会にとってもなくてはならないものになっている。もともとは個人のコミュニケーションツールとして普及したものの、現代では映像メモとしても利用されるデジタルカメラや電子メール、或いは電子掲示板を含むインターネット上のサービスを利用でき、また電子マネー端末としての機能も追加されつつある。その結果「一つの装置」が生活の中に占める地位も拡大し、携帯電話を忘れたり落したり壊したりといった事態にあうと「携帯電話がないと生活が不便で仕方が無い」といった状況が発生させる。

(2) 携帯電話依存症が何を引き起こすか。

①公共の場における社会規範を無視するかのような携帯電話の利用。

②目の前にいる相手とのコミュニケーションよりも、携帯電話を優先する

このような現象が引き起こされるのが、携帯電話依存症。一般的にこのような現象・事態に陥っている人たちのことを「携帯電話に依存する若者」という。

私たちの身の回りでも多くこの現象を目にすることがあり、そして、限度はあるもののこれを行ってしまうのも私たち10、20代の若者であるが、現在、携帯電話の普及した日本では、この現象は10、20代の若者だけではないと感じた。私はそう感じたのは、電車に乗るときのことだった。ホームでの待ち時間、そして電車に

乗ってからの移動時間になると、多くの人が携帯電話を開く光景を目の当たりにすることができる。携帯電話を開くことによって自分の世界に閉じこもるのだ。そして、上でも挙げたように、公共の場の社会規範を無視するように携帯電話を使用する姿もうかがえる。車内での電話、着信音、そして、自分の世界に入りすぎて周りが見えていない結果、高齢者、子持ちの母親、身体の不自由な人に対しての配慮に欠ける場面に遭遇する。

4 携帯のどこが悪くて、何が良いのか

すでに私たちの生活の一部として定着し、世の中を携帯社会とまで言わせる携帯電話。人々は携帯電話のどのような部分にメリットを感じ、それを持ち続けるのか。逆にどのような部分でデメリットを感じ、携帯社会に苦しめられているのか。あるサイトでの携帯のメリット、デメリットについての単純な比較を参照に、それを探ってみる。

(1)：メリット・・・

- いつでも連絡がとれる。
- 緊急時に役立つ。
- ワンセグがある。
- 調べ物が出来る。
- GPSや防犯ブザーがついているから安全。
- メールで、数人に一気に用件を伝えることができる。
- 家族や友達とコミュニケーションがとりやすい。

手軽に使える、防犯などの部分でメリットを感じている人が大半を占めている。凶悪犯罪などが増える近年では、親が小学生の子供にも携帯電話を持たせるのには、防犯の面を強く意識してのこともあるだろう。最近の携帯では、多くの携帯電話にも防犯ブザーの機能がついているが、子供用の携帯電話にブザー型の携帯電話で、携帯を持つ子供の視線よりも、それを持たせる親からの視線で作られた防犯機能付き携帯電話が注目を集めている。そして、GPS機能がついていることもメリットとして挙げられていたが、これも近年のニュースなどを見ても、携帯のGPSで犯罪に巻き込まれた人の位置をつかむなどして、安全面で支持されている。DOCOMOのスマートフォンのCMでは、まさに携帯電話は日常でのパートナー、といった表現をしているように、現代の携帯電話の普及した日本では、携帯電話は私たちの私生活のパートナーとなっている。

ここからは携帯電話のデメリットを見ていく。メリットと矛盾してる意見もあるようだ。

(2) デメリット・・・

- 会社などにいつでも連絡され監視されてしまう。
- 子供の交友関係をつかみにくなる
- 詐欺サイトや違法サイトが潜伏しやすく氾濫している
- 犯罪に巻き込まれやすくなる
- 持っていないと仲間はずれにされてしまう
- 漢字が書けなくなる場合がある

「会社に監視されてしまう」、「子供の交友関係が見えない」、「犯罪に巻き込まれる」、「持っていないと仲間外

れにされる」などといった意見から見えてくるのは、日本の社会がすっかり「携帯社会」になってしまっている、ということである。社会現象でもあるこの問題は、個人で解決するのは難しい問題となっている。中でも私が気になったのは「もっていないと仲間外れにされてしまう」という意見。学生の目線で考えるならば、携帯電話が普及したことによって、友だちとコミュニケーションを取る場はもはや学校だけに収まらなくなった。家に帰ってから友だちとは気軽にコミュニケーションがとれる。これに参加するには、携帯電話が必要になるが家の方針などによっては携帯電話がすぐに持てない家も少なくはないと思う。政府の教育再生懇談会では5月17日の会合で「小中学生に携帯電話を持たせないよう保護者らに求める」という提言を報告に盛り込むことで一致するなど、国を挙げての対策も行っている。国を挙げての対策をするには、何もコミュニケーションだけの話だけではない。携帯電話を使う、ということは少なからず「社会」の渦に巻き込まれることになる。携帯電話は一番身近なパートナーでもあるが、一番身近な「社会」への道かもしれない。その意味でも対策を行っている。

携帯電話はインターネットに手軽にアクセスできるアイテムである。が、しかし、その分犯罪にも巻き込まれやすいということでもある。メリットの部分では「防犯」という面で挙げられていたが、逆に一番身近なパートナーから巻き込まれる危険性もあるのだ。

5 携帯による事件

上でも挙げた通り、携帯電話から始まる事件・犯罪はたくさんある。2010年では携帯電話の普及率は89.3%にもなる。これだけ世の中に普及した携帯電話からは様々な問題が起こっている。

- 出会い系サイト
- 架空請求
- 中古携帯データ流出
- 迷惑電話
- 迷惑メール
- プチ家出（事件？）

面白いのが「プチ家出」というものである。事件かと言われたら少しずれているかもしれないが、携帯電話が普及してから起きるようになった例である。「プチ家出」というくらいなので家出なのだが、いつでも家族と連絡の取れる携帯電話をもって、外で無断外泊するもの。親は「いつでも連絡のつく携帯電話をもっているので放置する」と言うのだ。これは新しい形の非行である。

そして記憶に新しいのが、ニュースでも取り上げられている京都大学での入試問題のインターネット投稿事件である。これも今までのことを考えると前代見聞の出来事であり、大きなニュースになった。私生活のパートナーは出来心といえ、大きなニュースになるほどの事件へ誘ってしまう。

私生活でのパートナーは社会につながる一番身近な存在。これを頭にいれて活用していかないと、とても危険な存在になることは間違いない。

6 固定電話と携帯電話と公衆電話と・・・

「固定電話があるのに、家の中でも携帯電話を使って通話してしまう」——。こんな方は多いだろう。これは世界的にみても同じ傾向にある。そのためもあり、主要な通信事業者の固定系の通話料収入は、年々減り続けている。大学生になって、私の周りでもひとり暮らしを始めた友だちはたくさんいるが、誰一人として、固定電話

をひいてる人はいない。そして、実家暮らしをしていてもすでに固定電話に頼ることはほぼない。そんな社会で固定電話が生き残っていくことができるのか。はたまた消えていく運命なのか。

そんな危機意識を抱く世界の通信事業者は、ここに来て固定電話と携帯電話の融合に向けて大きく動き出している。両者を融合することで、事業者に新たな収益とコスト削減を、ユーザーには新たなメリットを提供しようと考えているのだ。それが「Fixed Mobile Convergence (以下FMC)」である。これは、固定 (Fixed) と携帯 (Mobile) を融合 (Convergence) させるというものである。これは今現在通信部門では一番注目を集めている話題だ。

そして忘れてはいけないのが公衆電話の存在。その存在はすでにほとんど確認されることがない。街などで見かけて珍しいと思うほどである。日本における公衆電話の設置台数は、1989年の約83万台から2003年には約50万台に減少している。携帯電話とPHSを合わせた普及率が固定電話の普及率を追い越したのは、2000年である。

そして、ここに新しく開発されているFMCが参戦するとなると、公衆電話はさらに生存が危なくなる。公衆電話の方が、家庭用の固定電話より消えゆくものかもしれない。

資料編

1 緑色の灯火 近代の若者はなぜダメなのか 携帯世代と「新村社会」

http://d.hatena.ne.jp/gaku_n/20100215/1266207191

2 KY

<http://ja.wikipedia.org/wiki/KY%E8%AA%9E>

3 I、携帯依存症

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%90%BA%E5%B8%AF%E9%9B%BB%E8%A9%B1%E4%BE%9D%E5%AD%98%E7%97%87>

II、Mobile Junky

<http://mobilejunky.net/b04.html>

4 I、II携帯のメリット、デメリット

<http://jp.meritdemerit.com/topic/1017>

II、小学生に携帯電話は必要か

<http://news.livedoor.com/article/detail/3644442/>

5 携帯電話トラブル

<http://keitainfo.com/trouble.html>

プチ家出

<http://homepage3.nifty.com/webpress/index.html#3.htm>

携帯電話普及率

<http://www.garbagenews.net/archives/1473207.html>

6 固定電話と携帯電話

<http://itpro.nikkeibp.co.jp/free/ITPro/OPINION/20050512/160764/>